

『消えない彼女』

1

「僕と、付き合ってください！」

今時、大学生にもなってこの告白の仕方はないだろうと思った。

四月が過ぎ、ほんのりと暖かい風が彼女の髪を撫でる。教室に差し込む光は煌びやかに輝いていた。

「いいですよ。私でよければ」

彼女は口の端に微笑みを浮かべた。

その言葉を聞いた瞬間、高揚感が湧き出てくる。

人生初の告白は成功に終わり、頬は緩み今すぐにでも叫びだしたかった。

「ただ、後悔させるかも、しれません」

そう言って、彼女はわずかに悲し気に笑った気がした。

2

とある教室で、僕は恋に落ちた。

授業は上の空。ことあるごとに彼女の後ろ姿を見ていた。

「また見てるのかよ」

横に座っていた友人がからかってくる。

「そんなに好きなら言って来いよ」

「もう言ってきた」

「え！ 返事は」

聞き返してくる友人を見て僕は彼女の元に駆け寄った。

そして、彼女を連れ友人の元に戻り、

「どうも、拓真君の彼女になった綾乃です」

「と言うわけだ。悪いな。先を越させてもらった」

「ずりい！」

机を叩いて悔しがる友人を見た綾乃は小さく笑った。

その時、一人の学生が口元を抑えながら教室を出ていく。

「また、か？」

「みたいだね。本当、なんでこの教室で授業やってんだ」

今いるこの教室では、気分が悪くなる学生がたまにいる。

噂では幽霊がいるだとか。

「所詮は噂ですよ」

綾乃は視線を戻して言った。

「んじゃ、俺いたら邪魔だろうし、このまま帰るわ。じゃあな」

「おう」

友人は手を軽く振って教室を後にし、残る学生は僕と綾乃だけになった。

「これからどうする？」

「まずは昼ご飯かな。拓真君は何か持ってきてる？」

「いや。どっかで食べる？」

「うーん、学食はこんでいるだろうし。外だね？」

「それがいいな。あそこは戦場だからな」

僕と綾乃は大学近くの飲食店に向かった。

外は、大学と違った騒がしさがある。

そんな日頃ならうるさいと思うことでさえ、今は新鮮に感じた。

「そんなに笑ってどうしたの？」

「いや、俺にも彼女ができたんだと思って」

きっと、楽しいんだと思う。今、この瞬間が。

後のことなんて考えられないし、考えたくもない。

「そう言えば、どうして私を選んだの？」

綾乃は僕の顔を覗き込むような仕草を見せた。

「一目惚れだけど？」

「そうきっぱり言い切れるのいいと思う」

「じゃあ逆に聞くけど、なんで僕を選んでくれたの？」

「それは……」

綾乃は視線を少し上げた。

言いにくい理由でもあるのかと、直感がそれを感じ取る。

「私はきっと、誰でもよかったのかもしれない」

彼女は僕と目を合わせることはない。

誰でもよかった。その言葉はありふれていて、妙に心を抉る。

「ま、これからだよ。ちゃんと私を魅了してね」

「……任せて」

自動車が乾いた風を巻き起こす。

喉が渴いた。早く着かないかな。

3

水曜日。

僕は綾乃とデートの約束をした。授業？ そんなもの飛ぶためにあるんだろう？

待ち合わせ場所で、わずかに湿った五月の風を肌で感じる。

2

待ち遠しかった初デート。多分、楽しみにしていたと思う。

時刻を確認し、薄く反射している窓で身だしなみを整える。そわそわした挙動は道行く人々に不審に思われただろう。

数分後、綾乃が到着した。

「拓真君おはよう」

「時間ぴったりだね」

「よし！」

「早速向かおうか。混むと後々面倒になるし」

「そうだね。あの落ちるやつ楽しみだな！」

綾乃を見て、そんなに楽しみにできるなんていいなと思った。

一喜一憂する綾乃は、ふと僕のことを見て、

「どうしたの？ 浮かない顔して」

と言った。咄嗟に顔を触り、自分がそんな表情をしていたのかと驚く。

すでに遊園地の門の前だ。その前で、なぜそんな表情をしていたんだ。

「また調子悪かったりする？」

「いや、そんなことないよ！ うん、そんなことない」

気丈に振舞うも、綾乃の瞳には僕の奥が見えているような気がした。

「は、早く入ろう！」

気持ち悪い。一刻も早くこの気持ちを払拭したい願望が、僕の足を速めた。

遊園地特有の賑やかな雰囲気は雑音にしか聞こえない。

こんな僕を見て、綾乃はどう思っているのだろうか。そう考えると、綾乃のことを見ることが怖くなって、すぐに振り向くことができなかった。

遊園地の人の多さはそこそこで、休日なら絶対に乗れないようなアトラクションも待たば乗れそうならいには空いていた。

「私あれ乗りたい！」

綾乃はアトラクションに指をさす。

誘ったのは僕だ。途中でやめるなど言い出せるはずもなく、不快な残滓が残る中、遊園地を満喫した。

遊園地の綾乃は子供のようにしゃぎ、ここにいる誰よりも輝いていた。

それに引き換え、僕は終始上手く笑えていなかった。

「はあ、遊園地って楽しいね！」

「遊園地に来るのは初めて？」

「そう言うわけじゃないけど。彼氏と来るのは初めて。だから、楽しい」

綾乃の屈託のない笑みが僕の胸に突き刺さる。

息を深く吐き、近くにあったベンチに腰掛けた。

「ねえ、本当に大丈夫？」

「うん……」

「何かごめんね。私だけ楽しんでみたいで……本当に、ごめんなさい。それ多分、私のせい」

「そんなことないよ！ 誘ったのは僕だし。綾乃は何も悪くない。ただ、少しもやもやしてて」

悪いのは僕だ。どうして、こんなに晴れない気持ちになってしまうのか。

きっと、表情は不景気に違いない。それが申し訳ない。

「じゃあさ、笑おうよ」

綾乃は自分の口角を指であげた。

「幸いにも、ここは遊園地なんだし。笑えるところがいっぱいあるよ」

「でも」

「笑えないなら、私が笑わしてあげる。笑ってた方が絶対幸せなんだよ。それが、私にできる貴方への報い方だから」

報いとは何だろう、と聞き返そうとした僕の手を綾乃は引き、走り出す。

「叫んじゃえばいいよ！ 叫んで、全部吐き出したらいいよ！」

僕の手を引く綾乃の手は暖かくて、どこか、冷たかった。

多分、彼女も緊張していたのだろう。それを僕のために。

「情けないな」

僕は自虐的に微笑んで、綾乃の隣を走る。

叫べ、叫べ。どうせ晴れない心なら、晴れにしてやれ。

絶叫アトラクションで、僕と綾乃は心底楽しそうに、叫んだのであった。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、空は茜色に染まり始めた。

「そろそろ閉園の時間だね」

「もうそんな時間か！ もうちょっと楽しみたかったな」

「よかった、拓真君がちゃんと笑ってくれて」

「綾乃のお陰です」

綾乃の言った通りに溜まっていたものを吐き出すように騒いだら、自然と不安が消えた。

「じゃあ、帰るか」

名残惜しいものはあるが、また綾乃と一緒に来れば楽しめるだろう。

「……また、があればね」

不意に、綾乃は僕の心を読み取ったように呟いた。

「どういう意味？」

「別に、ちょっと、言ってみただけ」

悪戯に笑った綾乃は、
「私、今日のことは忘れない」
と、悲し気に言葉を紡いだのであった。

それから、綾乃と一緒に多くの場所に行った。毎日が充実していくこと実感した。
彼女も、最初の頃よりも素敵な笑顔を見せるようになっていた。
ずっと、この時が続けばいいなど、思った。事実、続くと思っていた。
しかし、終わりはいつでも唐突にやってくるもので。
付き合って一ヵ月。梅雨に入り、雨がよく降りようになった頃。
「ありがとう、楽しかった。だから、もう会えない」
と残して、彼女は、姿を消した。

4

連絡は通じない。あの授業にも来ていなかった。
不安に思った僕は友人にこのことを話した。
「なあ、綾乃見なかったか？」
もしかしたら見たかもしれないという淡い期待だ。
だが、帰ってきた答えは、
「あやのって、だれだ？」
残酷なものだった。
息を飲んだ。友人の発した言葉は脳内で何度も反響し、その意味を理解しようとする。
「あやのってもしかしてお前の彼女か？」
「なんで。あの授業でいつも一番前に座ってた女子だよ！」
「あの授業で？ おいおいそんな子、元々いなかったぜ？」
友人はからかうように僕の言葉を流す。
それがたまらなく癩に障り、怒りが喉を通った。
「なんでだよ。前に紹介しただろ！ お前だって見てただろ！」
「だから、なんの話してんだよ。俺は知らないって、そのあやのって子を」
話に通じていないのか。いや、友人は至って真面目に話している。
嘘を言っている気はしない。だとしたらなんで。
他の人にもあたるが、誰も覚えていなかった。
なんで、どうして。皆揃って忘れてるんだよ。
――あやののことを。

「……え？ あやの？」

いけない。これ以上先を考えてしまっては、取り返しのつかないことになる。

しかし、理性がそれを食い止めても、頭では分かっている、無意識は考えてしまった。

「あやのって、誰だ……」

何かが崩れ落ちる音がした。

過ぎた思い出も、彼女の笑顔も、温かさも何もかも、全部。

僕は走り出した。向かった先は彼女と始めて出会った教室。

扉を開けるのが無性に怖かった。この中に彼女がいなければ全て虚空に消えてしまうのではないかと思った。

でも、僕は扉を開いた。

「あや……綾乃」

誰もいない教室。その中で、ぽつりと、女性が立っていた。

僕は彼女の名前を呼ぶ。

静かな教室は冷たい空気に満ちていた。

「……私ね、本当はここにいちゃいけない存在なの」

唐突に、突拍子もないことを呟く綾乃。

「知ってるでしょ。この教室の噂。あれ、全部私のせいなの」

「何を」

「五年前、私はこの教室で命を落とした。突然の心臓発作でね」

語られる言葉は酷く淡々としていた。

「当時、私には好きな人がいた。でも、その人に何も言えずに、死んだ」

彼女の思いつめるような横顔は悲しみに溢れていた。

「で、気付いたら、ここにいた。地縛霊って知ってる？ 多分、そんな感じ。未練を残してこの世を去った私は、ただの残留思念。中身がない空っぽの存在」

雨が降る外を見て、彼女は薄く笑った。

「それで、果たせなかった未練は無意識に私の回りにいる人から喜色を奪って、他人を不幸にしていた」

体調が悪くなるのも、僕が遊園地で気分が上がらなかったのも彼女が近くにいたからだ。

「やめたいと何度も思ったけど、私の未練がずっとこの場所にへばりついて、止められなかった」

過ぎた日々は一ヵ月もない。でも、僕には分かる。

辛かったに違いない。優しい彼女にとって、それは耐えがたいものだったはずだ。

綾乃は「でも」と続ける。

「そんな時、貴方が現れたの」

彼女は涙を流していた。

「拓真君。あの時、誰でもよかったって言ったのはこのせい。私の未練が晴れるなら、誰でもよかったの」

「……」

「でも、今は違う。貴方でよかった。貴方じゃなきゃ、私はきっと……」

次の言葉を紡ごうとした瞬間、彼女の姿が薄く透け始めた。

「もう、時間のようね。私は本来いない存在。だから、誰の記憶にも残らない。貴方の記憶にも」

徐に、彼女は僕と視線を合わせ、

「だから、私のことは全部忘れて。お願い」

笑顔を作った。

でも、僕には見えていた。彼女の、隠している本心が。

「忘れられるわけ、ないだろ」

忘れて欲しくないと、彼女の本心が叫んでいる。泣いている。

「過ごした時間が短いとか、まだ互いを知らないとか、そんなことは知らない」

ならば応えなければならない。

僕は気付いたら走っていた。

そして、彼女のことを抱きしめる。

「皆が忘れても僕は覚えてる！ 綾乃と過ごした時間は絶対に忘れない！ だから、笑ってくれ。笑って、別れよう」

人生初の失恋だ。

こんな別れ方は不本意で仕方がない。綾乃にこんな運命を与えた神を殺したい。

腕の中に入る綾乃は小さく震え、

「ありがとう、やっぱり貴方でよかった……好きだよ……」

「俺も、好きだ」

涙は頬を伝う。それでも僕は必死に笑う。

そして、彼女を抱きしめていた腕に感触がなくなった。

光の粒子は窓の外に向かい、天へと昇っていく。

高く、高く昇り、最後には雲の裂け目に消えていくのであった。

「忘れない」

雨は止み、後光が地上を照らす。

僕は空を見上げながら、堪え切れるはずがない涙をひたすら、流すのであった。

梅雨が明け、夏の暑い日差しがアスファルトに反射する。

「どうだよ、お前の彼女見つかったか？」

「いや、見つかってないよ」

「てかさ、ホントにいたのかよ。お前の夢の話でもしてんじゃないのか？」

友人は頭の後ろで手を組んで軽口を叩く。

「いたよ、ちゃんと。綾乃は」

消えるはずがない。だって、僕は彼女のことが好きなのだから。

忘れない。綾乃と言う僕の大切な人がいたことを。

たとえ、誰の記憶から消えたとしても。

僕の中で『消えない彼女』がいることを、決して忘れない。

2019年9月29日